

「天と地と見えるものと見えないものすべての造り主」

(ヘブル11・3)

一、「天と地」

きょうは、ニカイア信条(ニケア信条)の「天と地と見えるものと見えないものすべての造り主を信じます。」からお話をさせていただきます。

ニカイア信条の原文は「私たちは信じます」という言葉から始まっています。その「私たちは信じます」という言葉が、「天と地と見えるものと見えないものすべての造り主」にかかっていることと受け止めてください。なお、この箇所元の文章は次のような順序になります。「造り主、天と地、すべて見えるものと見えないもの」です。

私たちは、イエス・キリストが「父」と呼ばれた神が「造り主」であると信じる告白をしています。では「造り主」とは何の造り主なのでしょう。天と地の造り主です。創世記1章1節に「初めに、神が天と地を創造した。」と書かれているからです。ちなみに、「天と地」という表現には、古代人の世界観と今と異なります。古代人の宇宙観が反映しています。古代人にとって「地球」という考え方はなかったからです。

ヘブル人への手紙11章3節をご覧ください。信仰によって、私たちは、こ

の世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。」とあります。ちなみに、旧約聖書で「世界」と語られる場合は「天と地」の「地」を指しますが、新約聖書で「世界」と語られる場合は旧約の「天と地」、すなわち「万物」を意味します。

二、使徒信条と比較する

私共は、しばしば使徒信条を告白します。必要なことです。ちなみに使徒信条は、西ローマ教会の流れにおいて生まれ、用いられた信条で、原文はラテン語です。一方、ニカイア信条(ニケア信条)は、原文はギリシア語で書かれ、それがラテン語に翻訳されて、東ローマ教会と西ローマ教会をつなぐ根この役割を果たしています。

使徒信条は「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」という文句から始まります。使徒信条には「すべて見えるものと見えないもの造り主」という言葉はありません。一方、ニカイア信条の前身とも言える「原ニカイア信条」には、「われらは信ず。唯一の神、全能の父、すべて見えるものと見えざるものとの創造者を。」(関川泰寛訳)とあります。見て、お分かりのように、原ニカイア信条には「天と地(の創造者)」という文句がありません。ニカイア信条には「天

と地」という旧約聖書の言葉が加わったのです。「すべて見えるものと見えないもの」というギリシア文化の影響を受けている人たちが理解する言葉に、「天と地」という旧約の人々の舞台となった地域の言葉を連なせたことが分かります。「天と地」は「すべて見えるものと見えないもの」と置き換え可能な言葉です。ちなみに、「すべて見えるものと見えないもの」なる表現は、コロサイ人への手紙とエペソ人への手紙に出てまいります。

三、「見えるもの」

さて、ギリシア文化の影響を受けている人たちが理解する言葉である「見えるもの」は何なのでしょう。それは、旧約聖書が語る「地」「世界」です。実は、ニカイア信条が採択されたとき、「見えるものの創造者」にたいせつなメッセージが込められていました。それは、キリスト教会の中にも忍び込んできていたグノーシス主義——それは、

きわめて漠然とした時代精神のようなものですが——の影響があったからです。その考え方によれば、物質、すなわち「見えるもの」は悪であり、見えるものから解放される知恵こそ貴いものだった。そうしますと、グノーシス主義の影響を受けた方は、神が「見えるもの」の創造者である」という教えに抵抗感を持つたわけでした。しかしニカイア信条

は語っています。「天と地と見えるものと見えないものすべての造り主を信じます。」と。

四、「見えないもの」

では、「見えないもの」とは、何なのでしょう。コロサイ人への手紙1章16節を見てまいりましょう。「天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。」とあります。「王座」「主権」「支配」「権威」は「見えない」諸霊力の代表ですが、それらを造られたのは御子です。そういうわけで、神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです(ローマ13・1)。

それだけではありません。当時の人々はおどろおどろしい迷信的な「見えないもの」を信じていました。古代社会においては、目に見えない領域で働いている力が日常生活に大きな影響を及ぼしていると考えられていました(↓エペソ2・2)。その「見えないもの」の領域に、御子による神の支配が及んでいるという告白です。何と力強いメッセージではありませんか。天と地と見えるものと見えないものすべての造り主を信じ、ゆだねようではありませんか。